

タイ王国大使館に聞く ～仕事のデジタル化と新しい生活様式～

新型コロナウイルス感染症によって、外国政府や駐日外国公館でも、職員の働き方が大きく変化しています。日本と同じアジア圏のタイでは二度の大規模ロックダウンを経験し、仕事や生活の在り方に影響がありました。駐日タイ王国大使館のウィチュリー・チョートベンチャクン参事官にお話を伺いました。

国際課

——二〇二〇年以降、新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナウイルスという。）が世界的に拡大しました。タイではどのような影響を受けましたか。

二〇二〇年、タイでは日本より少し遅れて感染者が増え、三月頃からロックダウンを行いました。ロックダウン中は、職場ではテレワーク、学校ではオンライン授業が行われました。その後、感染者が減った時期もありましたが、二〇二一年四月頃に再び感染者が増えました。今はタイの感染者数は減少傾向にあり、外出や渡航の規制緩和を行っています。

実はタイでは、感染拡大以前から、書類をオンラインでやり取りすることが多くありました。そのため、これまで対面で行っていた仕事をテレワークへ移行することは比較的容易だったと思います。ただやはり、新型コロナウイルスの感染拡大によって、テレワークやオンライン会議をする人は増えましたね。以前は、テレワークやオンライン会議を行うシステムが整っていても、多くの場面で対面形式を選んでいました。

——タイでは、新型コロナウイルスの状況下でどのように働いているのでしょうか。

私は外務省から来ているので、まずは本

国外務省での働き方をお話しします。私が所属している外務省の場合は、以前から、Eサブミッションシステムという、電子書類の集中管理システムを導入しており、テレワークをすることができました。そのため、感染拡大を機に働き方が大きく変わってわけではありません。Eサブミッションシステムはとても便利な一方で、いっ



アユタヤのワット・プララム遺跡（写真クレジット：タイ国政府観光庁）

な仕事にも家で対応できてしまうために、導入前よりも仕事量や仕事時間が増えていると感じている職員もいます。

Eサブリミッションシステムは外務省独自のものです。政府内組織の一部では、ロックダウンが行われた当初、テレワークをするためのシステムが整っておらず仕事が行えない状況もあったようです。外務省でも、一部の外部組織とは紙の書類で連絡を行う必要があります。そのために出勤しなければならぬ担当者たちは、交代でテレワークを行うなど工夫しながら働いていました。ロックダウンを通じて、デジタル化が不十分だった組織は課題を認識し、システムを整えていったと思います。

テレワークに関連して、会議もオンラインで行うことが増えました。オンライン会議は、職員同士の打合せにはとても便利です。ただし、対面の方が望ましい場面もありますね。例えば、二国間でリーダー同士が会議をする際には、互いの国の様子や雰囲気を見聞きすることが大事なことで、オンライン開催と対面開催ではやはり違います。また、外交官が国際会議に参加する際は、議場外における調整や会食など、会議以外での活動も国際関係構築のために重要ですが、オンラインではできません。

——駐日タイ王国大使館では、新型コロナウイルスの状況下でどのように働いているのでしょうか。

日本国内の感染者数が増えていて出勤を控えるべきときには、テレワークをしたり、出勤人数を半分ずつにしたりしていましたね。本国の外務省から書類が届く場合、外交官はオンライン上でアクセスし、編集することができますが、現地スタッフはアク

セスできません。そのため、必要に応じて書類を現地スタッフに送るなど、工夫をしていました。

テレワークのために工夫する中で、効率化したこともあります。以前は書類を作る時、印刷した書類を上司が修正し、作成者にパソコンで直させてサインをしていました。今では全ての書類をメールで送るので、作成者が上司に送ると、上司は自分で修正して、更の上に送ります。作成者に戻したりサインをしたりという手間がなくなり、時間が短縮されました。

世界には九七か国にタイ王国大使館があるので、私たちと同じような働き方の大使館もあれば、違う大使館もあるのだろうと思います。日本には東京の大使館のほか、大阪と福岡に総領事館があり、働き方も異なります。

——タイ国内の民間企業では、デジタル化やテレワークにどのように取り組んでいますか。

タイでは、行政よりも民間の方がデジタル化されており、テレワークにも対応しやすかったと思います。特にバンコクでは交通渋滞が激しいので、通勤の負担を避ける



バンコクの市街風景（写真クレジット：タイ国政府観光庁）



カンチャナブリーのマーケット (写真クレジット：タイ国政府観光庁)

ために以前からテレワークが進んでいました。もちろん、ロックダウンをきっかけに、テレワークを行う人は更に増えたと思います。

テレワークを行う人が増えたことよって、住居に対する価値観が変わりました。これまでは家は休む場所であり、狭くても職場に近い、コンドミニアムと呼ばれるよ

うなアパートやマンションが好まれました。しかし、家にいる時間が増えた結果、実家に帰る人や、一軒家を買う人が増えたのです。また、地方で家を買うという選択肢も考えられるようになりました。例えば私の友人は、家で仕事ができるので、オフィスがあるバンコクを離れて海辺の町に引っ越しました。デジタル化によってオフィスに行く必要がなくなれば、そのような人が世界的に増えていくのでしょうか。

——タイでは官民共にデジタル化が進み、テレワークが普通になってきているようですね。ロックダウン中、子供たちの様子はどうでしたか。

まず、学校の状況についてお話ししますね。タイでは二〇二〇年、ロックダウンと同時に登校を禁止して、オンライン授業を行っていました。その後、一時期は対面授業を再開しましたが、二〇二一年の四月頃から再び感染者が増えたため、年度替わりで多くの学校が休みだったその時期から最近まで、対面授業はありませんでした。最近になって通学が再開されたので、友人や親戚の子供が、学校の友人と会えてとても喜んでいる様子を、フェイスブックなど

で見えています。

ロックダウン中は、子供も親も家にいたため、家族と一緒に過ごす時間は増えました。ただ、子供の様子を見ながら仕事をすることはきつととても大変ですね。子供のいる職員はもちろん、その同僚たちも、大変さを感じていたと思います。

授業をオンライン化するに当たって、制度や設備上の問題は少なかったと思います。しかし、子供にとつては、学校に行かない状況に慣れることが難しかったようです。例えば、小学三年生の私の姪は、カメラの前でじっと座って集中することがなかなかできませんでした。一方で、子供たちは、いわゆるデジタルネイティブです。なんと、一生懸命勉強している自分の写真を画面に映していることがありました。先生が見る画面上は勉強をしているけれども、実際には遊んでいるというわけです。

オンライン授業に伴って、アプリを活用した勉強も増えてきています。しかし、教科学習だけが学校の目的ではありませんね。自分の感情や体の動かし方、コミュニケーションなどを勉強するためには、やはり対面授業も必要なのではないでしょうか。

——参事官は、新型コロナ発生時から日本で過ごされる中で、本国と日本を比べてどのように感じられていましたか。

日本人の特性として、協力すること、計画を立てること、ルールを守ることなどがあると思っています。日本では、タイのような厳しいロックダウンはありませんでしたが、国民性によって感染対策が進み、感染者の減少につながったのではないでしょう。日本のワクチン接種は、医療関係者や高齢者を優先する計画であつという間に進み、今では世界第二位の接種率になっていますね。計画を立てるのに時間はかかったかもしれませんが、結果から考えれば、日本の方法は良かったのではないかと思います。

渡航者への措置は、海外と比較すると、日本は慎重な傾向にあると思います。タイの場合は二〇二一年一月現在、入国後一泊だけはホテルに泊まってもらい、PCR検査で陰性であれば、その後の行動は自由にできるようになっています。

——日本では、感染者が少ない二〇二〇年秋に、国内の観光産業支援としてG.O.T.O.トラベル事業が行われました。タイは観光

国だと思えますが、国内の観光政策はどうでしょうか。

タイでも、日本のG.O.T.O.トラベルと同じような政策を、ロックダウンの一回目が終わった時期に行っていました。名前も日本のG.O.T.O.トラベルと似ていて、一緒に出かけようというような意味でした。

キャンペーンで旅行に行く場合、金額の制限付きではありますが、ホテル代の四〇%を政府が負担していました。また、一人につき一〇泊までは安くする取組や、航空券の四〇%割引などがありました。

元々タイは観光が魅力の一つですので、バンコクの人が地方に行くのは、観光産業支援の良いきっかけになりました。

ぜひ皆さんも、新型コロナが収まったらタイに観光に来てくださいね。

——ぜひタイに行ってみたいです。本日はお忙しいところインタビューに対応していただき、ありがとうございました。

(取材は二〇二一年一月に行いました。)



Profile

ウィチュリー・チョート ベンチャクン参事官

2005年にタイ外務省入省。
在外勤務は2012-2015年在トルコ大使館を経て、2019年12月より現職。
趣味はスキューバダイビング、スキー、ギターなど。